

そろそろ落ち着いた議論を —双方向のリスク・コミュニケーション の活発化を期待する—

梶野 良穂

Hino Yoshio

((独)産業技術総合研究所)



東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故から2年以上が経過し、ようやく避難区域の見直しがなされ、除染活動も軌道にのってきた様子である。私も放射線計測に携わった者として、この2年間に周囲の人々が持ち込んできた多くの食品や庭の土などを測定し、わずかなりとも不安感を減らすことに役立ったと自負している。とはいえ、ほんの少しでも放射性セシウムが検出されると「気持ちが悪い」という理由で食べることをためらってしまう人に、バックグラウンドや⁴⁰Kの話をしてはなかなか納得してもらえない。マスコミの影響もあり、閾値なしのLNT (Linear Non-Threshold) 仮説が一般の人々に広く浸透していて、「こんなわずかな放射能を気にする必要はないですよ」と言っても「でも、発がんの可能性はゼロではないのですよね」とかみ合わない議論になってしまう。これは、恐らく皆様の多くが共通に感じたことであつたと考える。

現在問題となっているのは主に放射性セシウム¹³⁴Csと¹³⁷Csであるが、食品中ではこれらを100 Bq/kg以下に規制している。一方、お茶の葉や干し椎茸には天然の放射性核種である⁴⁰Kが数百 Bq/kg、干し昆布に至っては2,000~3,000 Bq/kgも入っていて、それを日常生活で何の心配もなしに消費している。カリウムもセシウムもアルカリ金属で体内では同じような振る舞いをするし、どちらもβ線とγ線を放出する核種である。それでいながら、数十 Bq/kg程度の放射性セシウムがあると気持ちが悪いと思うのは、どうしてであろうか。

このような悩みを持ちながら、ある時、本誌の1月号主任者コーナーに掲載された中谷内一也氏の『リスク・コミュニケーション第一歩』を拝読し、目からうろこが落ちる思いがした。正に、私が悩んでいたのは、相手に分からせようという気持ちが空回りしていたからなのである。まずは相手の話を傾聴することから始めるべき。教えに行くのではなく、聴きに行く。双方向のコミュニケーションが重要とのことである。

低線量放射線の問題を科学的・統計的に実証することは極めて難しく、恐らく今回の福島第一原発事故においても有意な結論は導けないであろうと考えている。これは、逆に言えば低線量被曝に対するリスクの小ささを物語っている。今更聞き直るつもりはないが、“絶対の安全”とか“ゼロリスク”などはなく、リスクがどの程度かをきちんと把握し、予測される大きさと代わりに得られるメリット、そしてそのリスクを避けるために要するコストなどを総合的に比較検討して判断することが肝要である。発電用原子炉に関する新安全規制システムが整備されつつあり、原子炉の再稼働に関する決断が迫られつつある今こそ、落ち着いた真剣な議論が必要であり、そのためにも、広く一般の人々を含めた双方向のリスク・コミュニケーションの活発化を期待したい。まずは、会員諸氏の身近な人々の話を聞いて、意見を交わす活動から開始してはいかがであろうか。説得するのではなく、気楽に聴かせてもらうことから。